

西村先生講義への質問

Q：競争取引と相対取引の比較で、相対取引の総余剰は少なければ、それは単に売り手側の個人満足度が下がっているだけで、取引量は7単位で増えているのだから、社会的損失とはいえないのではないか？という質問にどう答えればよいですか？

A：市場取引のメリットは、買い手に消費者余剰、売り手に生産者余剰が生れることでした。そして、総余剰（＝消費者余剰＋生産者余剰）が最大になるのは、完全競争取引での市場均衡状態（需要曲線と供給曲線の交わる点）です。すなわち、**一物一価**（買い手も売り手も同じ価格で取引する）が成立している市場均衡（売れ残りも売り切れもない状態）です。これを説明するために、独占取引と相対取引を取り上げて比べてみました。

（売り手）独占の状態では、売り手が市場価格を操作できるので、完全競争の市場均衡価格よりも高い価格を設定するでしょう。すると、市場価格が上昇するので取引量は減少します。その結果、消費者余剰は減り生産者余剰は増えます。ところが、消費者余剰の減少分が生産者余剰の増加分を上回るため、総余剰は完全競争取引での総余剰よりも少なくなります。この減少分は「社会的損失」あるいは「死荷重」と名づけられ、これでもって独占市場の弊害が説明されています。

次に、相対取引ですが、市場取引量は完全競争市場における取引量を上回るケースも生じます（2009年青山学院大学国際政治経済学部の入試問題を参照）。ただここで注意すべきことは、通常相対取引は**一物多価**になることです。初めに述べたように、取引することによって個々の買い手には消費者余剰が発生し、個々の売り手にも生産者余剰が発生します。ところが、これらの総和である総余剰は完全競争取引での総余剰よりも小さくなっています。この減少分を独占市場のケースと同じように「社会的損失」と呼んだのです。確かに、この言葉の使い方は適切でないかもしれません。むしろ、「相対取引が引起こす総余剰の減少分」と名づけたほうが理解しやすいかもしれません。ただ、注意していただきたいのは、相対取引によって売り手側の個人満足度（＝生産者余剰）が下がっているとは必ずしも言えません。完全競争市場の取引よりも高い価格で売ることのできる売り手もいます。買い手も同様です。完全競争市場の取引よりも低い価格で買うことのできる買い手もいます。相対取引を歓迎する取引者も存在するかもしれません。しかし、全体として眺めると総余剰が減少するということが重要です。